

## 【作物】

## 1 早期水稲の管理

- (1) 中干し：6月上旬頃(出穂35～40日前)から、必要茎数(約18～20本)/株が確保され次第、足跡が軽くつく程度に行います。中干しの目安は約7～10日間で、圃場により土の乾き具合が異なるため、土壌条件に応じて連続または間断での中干しをして下さい。
- (2) 追肥：根の活力を高めるため、出穂40日前頃にPKミックスを20kg/10a施用して下さい。

## 2 普通期水稲の管理

## (1) 品質向上対策

登熟期(特に9月)に平均気温26～27℃以上の高温になると、腹白粒・乳白粒など白濁した玄米(白未熟粒)が発生して品質が低下します。対策として、田植時期は6月中旬以降として、無理な早植えは避け、株間22cm以上(45～50株/坪)の植え付けとし、日当たり・風通しを良くして下さい。

また、にこまるは、田植時期を6月1日～15日頃までとし、あまり遅植えにならないようにして下さい。栽植密度は過度の疎植にした場合は青未熟の発生割合が多くなりますので50株/坪程度として下さい。

なお、さといも・やまのいも等野菜作付後では基肥量を減らして下さい。

## (2) 病害虫防除

「フルターボ箱粒剤」を1箱当たり50g施用(移植当日)して下さい。

いもち病、紋枯病、イネミズゾウムシ、ツマグロヨコバイ、ニカメイチュウ、イネツトムシ、ウンカ類、コブノメイガの総合防除剤です。

## (3) 水田雑草防除(除草剤散布)

農薬名	使用時期	使用量/10a	使用回数
コメットジャンボ	移植後5日～ルエ2.5葉期	30g/バツ10個	1回
ジェイフレンドフロアブル	移植後5日～ルエ3葉期	500ml	1回
カチボシ1ヤ粒剤51	移植時・移植直後～ルエ2.5葉期	1kg	1回
銀河1ヤ粒剤	移植時・移植直後～ルエ3葉期	1kg	1回
クサトック粒剤	移植時・移植直後～ルエ2葉期	3kg	1回
ガンガン豆つぶ250	移植後3日～ルエ2.5葉期	250g	1回

## 【使用上の注意】

- ア 高低差がないよう均平に耕起・代かきし、丁寧に畔塗りして漏水防止に努めましょう。
- イ 除草剤散布後3～4日間はそのまま湛水を保ち、田面を露出させないようにしましょう。
- ウ 除草剤散布後7日間は落水、かけ流しはしないようにして下さい(田面が露出し、入水が必要な場合はゆるやかに入水しましょう)。
- エ 藻類の発生が多い場合は、薬剤の拡散が妨げられるので、ジャンボ・フロアブル・豆つぶ剤は注意しましょう。
- <松本>

## 【野菜】

## 1 さといも

## (1) 疫病対策

- ・梅雨期の防除を重点的に行って下さい。
- ・25℃以上の高温と長時間の降雨条件で、急激に被害が拡大します。
- ・ジーファインを予防散布し、初発を確認したら発病葉を早期除去し、アミスターを散布します。

薬剤名	希釈倍率	使用時期/回数	特徴
ジーファイン水和剤	1,000倍	収穫前日まで/—	予防効果。水中に沈みにくく、少量の水で希釈すると発砲するので溶かし方に注意する。高温多湿時に薬害を生じる場合がある。
アミスター20フロアブル	2,000倍	収穫14日まで/3回	予防・治療効果。浸透移行性がある。連用すると耐性菌が発生しやすい。高温多湿時に薬害を生じる場合がある。

注意点:展着剤は、さといもは散布した液が付着しにくいいため、まくびか5,000～10,000倍を加用する。なお、高温・多湿など薬害の生じやすい気象条件の場合10,000倍で使用する。

## (2) 全期マルチ栽培

## ア 土入れ

子芋・孫芋の品質向上とマルチによる焼け防止のため、子芋着生時期(地上部が本葉4～5枚)までに、一輪管理機により土入れ(マルチ上に土を乗せる)を実施して下さい。

## イ 害虫防除

ハダニの発生時は、サンマイトフロアブル1,000倍又はコロマイト乳剤1,000倍で防除して下さい。

## (3) マルチ栽培

## ア おおなか

孫芋着生時期に、おおなか作業を行って下さい。目安は、マルチ栽培では5月下旬～6月中旬頃、露地栽培では6月上～下旬です。

## イ 追肥

おおなか一発体系は里芋用SRコート「991」を120kg/10a、化成体系はMB粒状固形を80kg/10a施用して下さい。

## ウ 害虫対策

コガネムシ類幼虫対策として、おおなか時にオンコル粒剤5を9kg/10a施用して下さい。

ハダニ発生時には薬剤散布(全期マルチ栽培と同じ)して下さい。

## 2 やまのいも

## (1) 芽かぎ、ツルなおし

2本以上萌芽している株は、早いうちに1本にします。芽かぎをする際は芽の根元から丁寧に取り除いて下さい。

また、茎葉が均一に繁茂するように、ツル直しをして下さい。

## 3 排水対策

例年、6月中旬頃から梅雨を迎えます。溝に雨水が溜まらないよう、排水を徹底して下さい。

<山口>

## 【果樹】

## 1 温州みかん

着果量に応じた管理を行い、果実の肥大促進と次年産用結果母枝の確保により、高品質果実の安定生産に努めて下さい。

## (1) 着果量が少ない樹

養分競合による生理落果を抑制するために、着果部周辺の強い新梢の芽欠きや被さり枝の除去を行い、幼果とその周辺の光環境を向上させて下さい。粗摘果は中止して、仕上げ摘果や樹上選果で着果量を調整します。

## (2) 着果過多の樹

早期の摘果で夏芽の発生を促し、樹勢維持と次年産用の結果母枝の確保を図り、隔年結果の防止に努めて下さい。

- ・早期(一次落果終了後の6月下旬頃)に樹冠上部1/3を全摘果。
- ・速やかに夏肥施用(窒素成分量5kg程度/10a)。
- ・発生した夏芽はミカンハモグリガの防除。

## 2 中晩相類

## (1) 摘果

中晩相類の大玉果生産には、肥大が旺盛な生育初期の摘果が効果的なことから、着果が多い樹から摘果を開始します。

着果が多い樹は、一次落果終了後から摘果を始め、粗摘果は概ね60葉に1果残す程度とし、葉数が5～7枚の有葉果を主体に着果させます。また不知火は、7月上旬までに全摘果量の8割程度を目標に摘果します。

## (2) 施肥(夏肥)、灌水

新梢の充実、幼果の肥大促進と樹勢維持を図るために、夏肥を施用します(伊予柑、甘平、不知火等は、6月下旬に窒素成分9kg/10a、愛媛果試第28号は、6月上旬に窒素成分8kg/10a)。

また、土壌が乾燥する場合は、灌水を実施し、肥料吸収を促して下さい。

## 3 病害虫防除

- かいよう病と黒点病の感染に注意し、薬剤散布を徹底して下さい。
- また、カイガラムシ、カミキリムシ、ハダニ・サビダニも防除して下さい。
- ・かいよう病：6月中下旬。ICボルドー66D200倍(高温時散布は薬害を生じることがある。夏季マシン油散布14日前までに散布)。
  - ・黒点病：落果後の第1回散布後、200～250mmの累積降雨または30日以内に2回目。ペンコゼブ水和剤600倍。
- <守屋>

## 【花き・花木】

## 1 アネモネ、ラナンキュラスの掘り上げ

掘り上げ適期は摘花のピークから40～50日後、葉が黄化し始めた頃です。若掘りは発芽率低下の要因となります。掘り上げ後は、日陰で十分乾燥させた後、手でもみ込み、根と土を除きます。また、乾燥機を使用する場合は、28～30℃で約40時間を基準とし、必ず一日に数回混ぜるようにします。

## 2 シキミ

## (1) 炭そ病

葉の縁から褐色の不定形病斑が形成されます。激発するとほとんど落葉します。5～8月に発生が多くなります。

## (2) シキミグンバイムシ

葉裏に寄生して吸汁加害し、葉の表面が白いカスリ状になります。葉裏に糞や脱皮殻が付着して外観が悪くなります。4～10月まで増殖を繰り返します。

## (3) フシダニ類

体長が0.15～0.2mm程度で、寄生し吸汁すると葉にまだら色のモザイク症状・紋々症状が発生し、黄化したり奇形葉になります。

## (4) 防除薬剤

定期防除として6月下旬～7月上旬に、殺菌剤のベンレート水和剤2,000倍、殺虫剤のオルトラン水和剤1,000倍、ダニ剤のピラニカEW1,000倍を混用散布して下さい。

茶園や他の作物が隣接して栽培されている場合や、ミツバチの巣箱の近くでは農薬の飛散に十分注意して下さい。

<安藤>

## 【畜産】

梅雨を迎え、湿気と暑熱両面の対策が重要な時期になりました。飼料給与面では、新鮮な餌と水を十分与えることが家畜のヒートストレスを防ぐ重要なポイントです。

## (飼槽の管理)

床面の取り残した敷き料や糞がハエ等衛生害虫の主な発生源ですが、飼槽の四隅の角に残った湿った配合飼料が変敗してハエ等の発生場所になっている場合があります。

暑くなると食べ残した飼料は短期間のうちに変敗しやすいため、飼槽の四隅に古い配合飼料の残さがある場合は取り除き、少量を複数回に分けたり、涼しい時間帯に給与するなど、新鮮で1日間に必要な量の餌を与えてください。それだけで家畜の嗜好性がアップします!

## (給水ニップル等配水の確認)

飲水量が不足すると、養豚の食塩中毒(餌と給水のバランスを崩すことによる)や牛の水中毒(断水直後の多量給水による発症)を起こすことがあります。猛暑に入るとより多量の給水が必要になりますので、この時期から給水ニップルや給水カップの破損、詰まり等の点検をし、与える水は長時間溜めおかず、低温で新鮮な水の補給に努めましょう。

<住吉>